

金

ぎんが

我

～個性輝く自分に～

令和5年2月

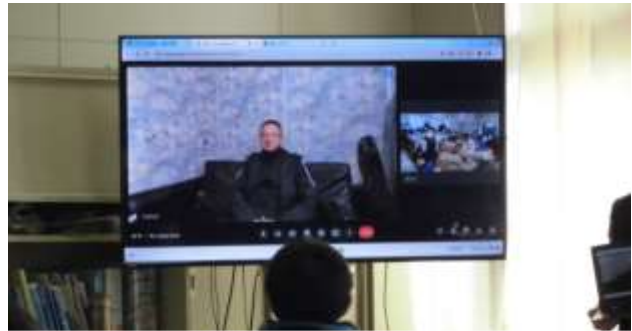
平根小学校 6年1組

HP用

文責:森田 明彦

世界の未来と日本の役割

～ウクライナ支援に尽力している県内の空手首席師範に学ぶ～



小沢隆さんは、世界各地に支部をもつ空手の首席師範。プロ格闘家の朝倉未来選手の師匠でもあります。そして今回、私たち平根小学校の社会科の「師匠」にもなりました。

小沢さんのウクライナ支援の具体は、NHKや民放のテレビでも報道されているので多くの人に知られています。小沢さんは「ウクライナの門下生を安全な日本に避難させたい」という思いをもち、高森町にも働きかけ、4世帯9人の避難受け入れを実現させました。小沢さんは言います。「特別なことをしたつもりはない。困っている人がいる。それを何とかしたい。自分が空手を教えた子どもが、がれきの下じきになってしまうことは耐えられない。人として当たり前のことをしてだけです。」この言葉に心打たれた子どもが多かったことは、小沢さんへのお礼の手紙からわかります。

小沢さんは実際に現地にも行っています。そこで経験したことから発せられる言葉のひとつひとつに、私も圧倒されました。空気が変わりました。「小沢さんたちの活躍に対して、日本は？世界は？」小沢さんの活動に学び、子どもたちの関心は「世界がもっと同じ考えをもつ仲間とつながる必要がある」と、国連やJICAの活動の学びへと発展していききました。

クロムブックが配布され、様々なことができるようになりました。でも何か物足りない。折角空間を飛びこえて「本物とつながって」学ぶことができるのに、時に操作の習得に専心してしまう教育活動を目にするにあたり、昭和生まれの老いばれポンコツ教師は疑問を感じていました。あふれんばかりの動画を手軽に視聴できる時代です。でも、そこに双方性はありません。技能は佐久市には有能なパソコン支援員さんがいます。協力し、役割を分業し、授業者とお互いの得意を生かして子どもの「学び」につなげればよい。何もかも一人で背負い込む必要はない。

「令和の日本型教育」ことばだけが一人歩きしている印象です。実践を通して「現代の授業創り」はどうあればよいか学ぶ、学び合う機会として今回の授業は佐久と縁のある帝京大学の鎌田先生もお招きし、授業公開としました。

本物の経験に、言葉に、知識に触発されて「語らずにはいられない」「考えずにはいられない」「問いをもたずにはいられない」そんな心震わせ、脳みそに汗して学ぶこと、それが平根小学校の「令和の日本型教育の学習活動」と発展し、学校教育目標「明日も来なくなる平根小学校」につながっていけばいいな、と今私は考えています。令和の日本型教育の実現に向けて、私たち教師ひとりひとりが主体的に実践を考え、行い、「内に問い、外に問い」ながら、我々も教師として成長し、そして子どもたちの成長につなげていきたい。社会とつながり、学びが「社会」と連結しているものでありたい、それにより学ぶことの意味や価値が少しで子ども達に伝われば・・・。